

ESBL の分離状況と ESBL / AmpC 鑑別ディスクの検討

○平本 卓,岡崎 瑠海,内田 梓,高橋 美紀,細谷 隆一,矢部 茂季,町田 哲男
村上 正巳(国立大学法人 群馬大学医学部附属病院)

【はじめに】ESBLs (Extend Spectrum Beta-Lactamase)をはじめ、AmpC 等のβラクタマーゼ産生菌はプラスミド性に感染伝搬するため、これらの菌を検出することは院内感染対策上重要である。また、ESBL と AmpC では感受性パターンが異なるため、適切に抗菌薬を選択する上で重要である。今回、ESBL / AmpC 鑑別ディスクの検討の機会を得たので当院における ESBL の分離状況と併せて報告する。

【方 法】2012年1月から12月までの1年間に当院で分離され、自動分析機器 WalkAway96plus で ESBL 判定基準により ESBL 疑いとされた *E. coli* の計 27 株を対象とした。ルーチンでは ESBL 鑑別法として P/C アーゼ (日水製薬)、微量液体希釈法 NMIC3.31E (SIEMENS) を行っている。ESBL / AmpC 鑑別ディスク (関東化学株式会社) の検査は添付文書に基づき、McFarland0.5 に調整した菌液をミュラーヒントン培地 (BD) に塗布し、ディスク距離は阻止円が読み取れるように十分に離して置き、35°C、18 時間培養をした。判定は目視にて行った。

【結 果】2012年 *E. coli* の ESBL の分離状況は外来患者

より分離された 72 株の 5.6%、入院患者より分離された 156 株の 10.9%、全体では 8.4%であった。

WalkAway96plus で ESBL 疑いとされた *E. coli* 27 株の報告結果は ESBL が 20 株、セファロスポリナーゼ産生菌が 7 株であった。

ESBL / AmpC 鑑別ディスクを検討した結果、20 株中 19 株で ESBL となった。乖離例 1 株では鑑別ディスクで判定不能であった。セファロスポリナーゼ産生菌 7 株ではすべて AmpC と判定された。

【考 察】ルーチンではセファロスポリナーゼ産生菌については AmpC の産生に関しては報告していない。臨床における抗菌薬選択にも AmpC 産生について判定できるのは有用と考えられた。また、今回の菌株にはみられなかったが、ESBL と AmpC を併せもつ菌株においても ESBL と AmpC 産生を同時に検出可能であるので今後も検討を重ねて行きたい。

細菌検査室 (8561)